
天地

ネットワーク テーブル 442号

発行：天地シニアネットワーク：2017・2・14

T E N T I ・ T O D A Y			1
会員の広場＜オノマトペ＞			2
連載作品			3
随 想	天のわざ、地のほまれ―地球を測れ、宇宙をはかれ― 19. 光、音、五感	伊那 闊歩	3
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語（16） ＜大原の里6・鞍馬山・由岐神社と鞍馬寺＞	大竹 漠洲	6
随 想	般若心経読本（3）	藤田 克明	9
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」「落語会」		1 2
事務局			1 3

T E N T I T O D A Y

事務所に近い裏通りにある時計屋さん、腕時計の電池交換と、バンドの取り換えを頼んだところ＜有難い、有難い・・・＞とつぶやきながら取り替えてくれました。必ずおまけをくれる果物屋、気を使ってくれる料理店、レストラン、理髪店など下町の人情の交流を楽しんでいます。

人情といえば、トランプ大統領と、安倍首相の関係、政治の世界ですから別物ですが、個人的には、ウマがあい波長がよく合うように見えます。

個人的な強い信頼関係が構築でき、日米同盟は揺るぎないものとなったとの安倍首相の発言は、頼もしい限りですが、関係が強くなればなるほどその反動も大きくなるのが世の中の常です。今後、日米間の難題がいろいろ出るでしょうが、個人的な関係を優先するのか、世界的な視野での立場を優先するのか、安倍首相の本領が問われることになります。

経済産業省、経団連など官民の連携で、「プレミアムフライデー」がこの2月24日（金）からスタートします。月末の金曜日は、企業、従業員に午後3時の退社を促し、旅行や飲食に積極的に活動してもらって消費を盛り上げるという趣旨だそうです。年金生活者には関係ない話ですが、3世代での旅行、飲食などの機会が増えるとなると懐具合に影響がありそうです。昔でしたら、マージャン屋が満杯になったでしょう。午後3時の退社、暑い夏は大変です。

お年玉記念切手、今年はなんと8枚もゲットしました。いつも4―5枚でしたから驚きです。確率の神様が間違えたか、特別ボーナスをくれたのかど

ちらかと考えていますが、吉か凶か、80の大代を迎えるので気になります。

会員の広場

「オノマトペ」無しでは、＜日本語はありえない＞＜日本の文化は語れない＞＜日本人の心情は表せない＞・・・1月に神田・一橋講堂で開かれた国立国語研究所・フォーラムでの一文です。恥ずかしながら、「オノマトペ」を知りませんでしたので、ご存知の方が多くと思いますが、レジメの一部を参考にと拾ってみました。

「オノマトペ」は、いろんな分野、場面で使われています。例えば
《歌》

- 犬のおまわりさん：ニャンニャン ニャニャーン、ワンワン ワワーン
- さとうきび畑：ざわわ ざわわ ざわわ

《短歌》

- ＜サラダ記念日＞（俵 万智）
立ったままはふはふ言っている おでんのゆげの向こうのあなた
向き合いて無言の我らの砂浜に線香花火ぽとりと落ちる

《川柳。標語》

- 壁どんを 妻にやったら 平手打ち
- そっと起き、そっと出かけて、そっと寝る
- 左右確認しっかりし、いつも心に＜安全を＞

その他、《会社名》《商品名》《動植物》などなど、沢山あります。

専門的には、「オノマトペ」は、次のように分類されるそうです。（金田一春彦・1978年）

- 擬声後・・・人間や動物の声を表す語（わんわん、げらげら等）
- 擬音語・・・自然界の音を模した語（ざあざあ、ぱちぱち等）
- 擬態語・・・無生物の状態を表す語（きらきら、さらっと等）
- 擬容態・・・生物の状態、様態を表す語（のろのろ、ぶらりと等）
- 擬情語・・・人間の心理や感覚を表す語（いらいら、わくわく等）

イギリス人は動詞で泣く、日本人は副詞で泣く、

英語（動詞）c r y , w e e p , s o b , b l u b b e t , w h i n m p e r 、・・・

日本語〈副詞〉ワーワー泣く、メソメソ泣く、クスンクスン泣く、オイオイ泣く、シクシク泣く

というのは、良く知られた話だそうですが、最近の若い人たちには、もっと新しいオノマトペもありそうな感じもしますが。

「オノマトペ」は、日本語の専売特許ではなく、また世界最大の「オノマトペ」言語は日本語であると思われがちですが、そうではないようです。南インドの「タミル語」、西アフリカの「ヨルバ語」など無制限といわれるほどに豊富にあるとのこと。（津田）

連載作品

天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

19. 光、音、五感

最近、人は夜空に輝く月や星をしみじみと眺めることなどしなくなった。現代社会の忙しさのなかで悠長にかまえて天体を観察する余裕などない。さらに我が国の大都市はおろか中小都市でさえ赤い灯青い灯が人の目をくらませ「街の灯りがとてもきれい」なので、わざわざ星座やギリシャ神話などに思いを馳せることもない。「星影さやかに」とか「見上げてご覧夜の星を・・・」など何か空々しい。（ひと昔前の歌ばかりでうんざりしないでいただきたい！）

筆者がむかし、アメリカ在住の友人（宇宙オタクの物理学者）に連れて行ってもらった米国カリフォルニア・ハミルトン山（標高 1283m）にあるリック天文台は、1887 年の創立以来、木星の第 5 衛星アマルティア（ガリレオ衛星より内側にあり、血のように赤い衛星）や同第 6（ヒマリア）第 7（エララ）第 9（シノーペ）衛星発見・・・など数々の実績を積み重ねつつあるが、そのころすでに麓にあるサンノゼ市の緑色の灯りの光害に悩まされていたようだ。

ハワイのマウナケア山（標高 4205m）山頂には巨大望遠鏡「すばる」があり、チリのアタカマ砂漠の奥にそびえるアンデス山中（標高 5000m）には、超巨大電波望遠鏡アルマ（スペイン語で「たましい」の意）があって、銀河の構造や惑星形成についての研究を行っているが、そこではさすがに人工的な照明に悩まされることなく満天の星を手中（眼中）に収めることができるようである。

ひとが肉眼で視ることができる最も暗い恒星の光度を 6 等級とする。6 等星よりも明るく見えて明らかに（眼視）光度のランクがひとつ上がっていると思える恒星を 5 等星とする。5 等星よりも明るくランクがひとつあがっていると感じられる星を 4 等星とする。このようにして 3、2、1 等星と次々に決めていく。明るく目立つ星には呼び名がついている。オリオン座のベテルギウス、リゲル、オオイヌ座のシリウス、コイヌ座のプロキオン・・・などは冬の夜を彩る 1 等星たちである。オリオン座の三ツ星ミントカ、アルニラム、アルニタクはすべて 2 等星だ。北極星ポラリスも 2 等星である。星の呼び名をいちいち解説することはできないが、中にはイテ座の「ヌンキ」のように、4000 年も昔シュメール人がつけた、いまや、その意味さえわからぬ星名も現

代の星図に残されている。

さて、こうして人の感覚によって決められた星の明るさは、大雑把でじつに曖昧であると思われる。しかしながら、後に発達した光度計による測定結果とくらべてみると興味深い事実が明らかになった。それによると、5等星の光度は6等星のその2.5倍、・・・、1等星の光度は2等星のその2.5倍になっていることがわかった。すると1等星の光度は6等星の光度の約 $100(=2.5^5)$ 倍であることがわかる。つまり、科学的な測定値は、等比数列として大きく変化しているのだが、それを人の感覚は階段を一段一段上るように等差数列的に識別するということなのである。

このルールは拡張することができて、1等星の2.5倍の光度を持つ星を0等星、0等星の2.5倍の光度をもつ星を-1等星、この2.5倍を-2等星・・・ということにする。7等星以下は肉眼では見えないのであるが、6等星の2.5分の1の光度の星を7等星とするのである。現在、巨大望遠鏡によって20等星よりも暗い天体が日常的に観測されているが、光学機器や電波技術の発展にしたがって、宇宙の果て（宇宙創成期）の（20等級以上の暗さの）暗いくらい天体の様子も捉えられるようになってきた。一方、満月の光度は-12.9、太陽の光度は-26.8である。太陽の光度は月のその31万6千倍にもなるが、眼視光度はただか階段14段のちがいである。

科学的に厳密な測定値をひとの感覚は、都合よく弱めて捉えるようになっているのだ。天体の光度の場合、6等星の光度を1とすれば、1等星の光度は100である。しかし眼はその対数として捉える：5等星の光度は $\log(2.5)$ 、4等星は $2 \times \log(2.5)$ 、1等星は $5 \times \log(2.5)$ 、・・・。つまり、眼視光度は、共通部分 $\log(2.5)$ の整数倍となっていることがわかった。なお、対数計算では、6等星の光度は0、7等星は $-\log(2.5)$ 、8等星は $-2 \times \log(2.5)$ となり、人為的な等級の数字と光度計の対数値を混同されないようご注意ください。なぜこういうことになっているのか？その理由は、ひとの神経がいちいち科学的な測定値に対応していたら、その変化についていけずおそらく神経系統はたちまちまいてしまうであろう。ひとの日常生活に支障をきたさないように、変化を識別できればそれでよいのである。その省エネルギーの値が、実測値に対して対数値なのだ。なお、対数 \log については後の回において詳述したい。

騒音についてもひとの感覚は、同じような対数的緩和策をとっていると思われるが、以下騒音についてはさておき、音楽を支配する基本原理について考えてみよう。音階について、系統的な研究を最初に行ったのはピタゴラス（BC 6世紀）であったと言われている。かれは解放弦の音程がおなじ1弦琴を2張（調ともいう）用意し、ひとつ（Aとする）はそのままにして（弦の長さを1としてその固有音を「ド」とする）もう一方（B）の弦の長さを変えて、2張同時に音を出す。2つの音が協和する弦の長さを記録していくのである。最初に、Bの弦の長さを $1/2$ にしたとき、Aと同質で最もよく協和する音が出た。これは、1オクターブ高い「ド、 $1/2$ 」の音なのである。次に弦の長さ $1/2$ と1の間の簡単な分数の長さにして試してみる、たとえば $2/3$ の長さにするとまた協和した。この音は「ソ、 $2/3$ 」の音なのであった。以後、この $2/3$ ルールを続けるのだ。つぎに、 $2/3 \times 2/3 = 4/9$ となって $1/2$ より

小さくなるがこれを 2 倍すれば $8/9$ となりオクターブひとつあがるが $1/2$ と 1 の間におさまる。これは「レ, $8/9$ 」の音である。こうして「ラ, $16/27$ 」「ミ, $64/81$ 」「シ, $128/243$ 」等が得られる。「ファ」の音は $2/3$ ルールには反するが、弦の長さを $3/4$ にして「ファ, $3/4$ 」をとる。こうして出来た音律（音の高さの相対的な比率）をピタゴラス音律といい、以後ピタゴラス音律が音楽の規範とされた。

以上の結果を弦の長さではなく、音の周波数で表せば、それは得られた分数の**逆数**（弦の長さの逆数）になって、次の表のようになる。

音名	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド
ピタゴラス 律	1	$9/8$	$81/64$	$4/3$	$3/2$	$27/16$	$243/128$	2

「ド, 2」の周波数は「ド, 1」の周波数の 2 倍（1 オクターブ上）になっていることに注意されたい。世界中の民族音楽の約 7 割はピタゴラス音律をもちいているそうだ。「ファ」と「シ」の音を抜いた楽曲もあって、これをヨナ抜きというそうだが「蛍の光」や「故郷の空」などがヨナ抜きである。

ところで音は、できるだけ単純な周波数比の 2 音、3 音がよく協和するという性質がある。それなら、次の表のような比率にしたらどうか。

音名	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド
純正律	1	$9/8$	$5/4$	$4/3$	$3/2$	$5/3$	$15/8$	2

これはベルリンやウィーン交響楽団が採用しているものだそうで「純正音律」という。この音律は「ド、ミ、ソ」「ファ、ラ、ド」「ソ、シ、レ」などの和音がよくハモリ、あのウィーン少年合唱団の「天使の声」もこの音律の美しい響きによって統制されているのである。ところが、欠点もあるもので「レ、ファ、ラ」の和音はほとんど不協和音とされて良いほど濁るのである。さらにこの音律は転調できない。

そこで、考えだされたのが「平均律」である。これは、周波数 1 と 2 の間を（和ではなく積として）12 等分するのである。つまり等比数列として等分するのだ。なにか定数 a があって、

「ド#」の周波数 = 「ド」の周波数 $\times a$,

「レ」の周波数 = 「ド#」の周波数 $\times a$ = 「ド」の周波数 $\times a \times a$
とすると

$$a^{12} = 2, \quad a^0 = 1, \quad a = 1.059 \dots$$

つまり、ある音の周波数の a 倍になってはじめて半音あがったように、ひと

は感じる。 $a + a + \dots$ ではないのだ。こうして出来上がった音律が平均律で、純正律に近い音になっているが、少しずつ音程が狂っている。しかし、転調は自由自在にできる。和音の純粋なひびきを犠牲にして、別の世界にいつでも移動できるというわけだ。

ピアノは平均律によって調律されているので、調律師はこの音のにごりを正しく出さなければならない。バッハの平均律クラヴィア曲集は有名で筆者も好きな曲集であるが、中でもロシアの巨匠スヴィアトスラフ・リヒテル（1915-1997）は、たとえば第1巻冒頭の曲（グノーがあ有名なアヴェ・マリアのバックにつかった）を純正律に調律して弾いているのだそうだ。音は軽やかでそれこそ天から降ってくるようなこの世のものとは思えぬ美しさではあるが、平均律で演奏せよというバッハの意図には反しているのではあるまいか。次の表に平均律による周波数を記しておく（いかにもきたない）。

音名	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド
平均律	1	1.122	1.260	1.335	1.498	1.682	1.888	2

なお、以上述べた平均律は12平均律であるが、15平均律などたくさんあるそうだ。通常「ラ」の音を440ヘルツ（Hz）として音程の基準にしているが、すると「ド」の音の実際の周波数は264 Hzである。モーツアルトの「ラ」音は422 Hzだそうだが、カラヤンは446 Hzを基準として、あのきらびやかな音を出しているそうだ。

自然の調和を追求してその原理を識ることは簡単そうに見えて、実は奥が深いものであることがわかる。

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（16）

大竹 漢州

若狭街道の古刹

大原の里6・鞍馬山・由岐神社と鞍馬寺

栃木県足利市稲岡は母の実家です。旅人が幼い頃、楽しみの一つは、八幡神社の境内で開かれる夏の巡回映画上映会でした。未だ明るい内から席を確保して、未だか未だかと期待に膨らんで待った記憶があります。映画の題名は何年経ても忘れることはありません。アラカン（嵐寛寿郎）の「鞍馬天狗」です。幕末の京洛を荒らす悪者と戦って、常に期待通りの結末に満足でした。嵐寛寿郎が杉作を抱えて馬に寄せ疾駆する姿に、恰も杉作に成った積もりで、大きな声援を送りました。最前列に座って見上げる様に画面を見つめ続ける幼児・旅人がいました。風が吹くと布の画面が揺れ、嵐寛の顔が歪み、可笑しい顔になった記憶が強く残っています。鞍馬天狗は鞍馬寺を住处にしていたのでしょうか？鞍馬寺が何処に在るかも知る由も無い幼い時代の遠い遠い思い出です。

終戦後、疎開を終えて東京神保町に戻り、両親と妹たちと一緒に生活が始まりました。当時の楽しみといえば、毎日路地に通ってくる紙芝居でした。神一枚一枚に展開するストーリーが、新しい世界の発見でした。ロボットもの、伝記もの、動物もの、昔話もの、そして戦記ものでした。幼い旅人が夢中にしたのは戦記もので、いわゆる源義経の生涯を語った「義経記」でした。不幸な押さない遮那王が、鞍馬山に棲むという天狗たちに、学問と剣術の修

行を受けて源氏の棟梁として成長していく姿に感動して、手に持った水飴が垂れ落ちるのも気がつかない程、幼い心を掴みました。この小さなメディアから旅人は義経を尊敬し、義経の生き様が、旅人の人格形成に与えた影響は多く、“筋を通すこと”“義を重んじること”が価値観として心に強く残り、時とともに成長していきました。

母実子の母親は足利市赤身から島田家に嫁いでいます。出身の吉岡家は代々が名主で歴史ある名家でした。母の自慢は源氏の出自で、しかも義経が祖先であることでした。古文書などは勿論ありませんが、母が根拠にしているのは、母が結婚に持参した簞笥の家紋が「笹竜胆」であったことです。「ひよどり超えの戦い」「壇ノ浦の戦い」での源義経軍の旗印は笹竜胆であったことは確かです。義経は龍馬と共に国民的な人気があります。兩人共に底流にながれているものは同じです。新たな世界を夢見て闘いました。しかし兩人共に道半ばにして殺されています。人を引き付ける人間的な魅力のある人物です。

余談です。坂本の名前には、龍馬と竜馬と二通りに書き分けられています。本名は勿論「坂本龍馬」です。それでは、坂本竜馬は？略字ではありません。司馬遼太郎氏が『竜馬がゆく』で創作した人物名が「坂本竜馬」です。司馬氏の小説で本来像から大きくかけ離れたイメージがつくられたのも事実です。龍馬の実像は志士から商士に変貌した人物です。特に長崎でグラバーに出会ってから、世界は船舶で、武器取引で莫大な富が得られると悟ったからかもしれない。

龍馬の実家は土佐本町の酒造業・金貸の商人。出身は近江・坂本であり、近江商人が祖でありました。坂本龍馬の写真が残っています。右を懐にした立ち姿です。手には何を持っているのか？ピストルとか法律書とか言われていますが、定かな事は不明です。興味の尽きない所です。問題は写真の胸の家紋は桔梗です。坂本家は明智光秀の流れをくんでいる家系です。家内の加藤家の家紋も桔梗です。義母の加藤家は明智光秀の家系であると聞いたことがあります。私たち夫婦の四人の孫には義経と光秀と血が僅かですが、流れている事になります。ヒストリーは面白い。鞍馬寺から大きく脱線しました。

本題に戻ります。私の血に流れている先祖、義経の育った鞍馬の地に向かって、かつて「鯖街道」と呼ばれていた道路を叡山電鉄鞍馬線に沿って、タクシーは北に進んでいます。かつて福井小浜から京都左京に、海産物を人力で運ぶ街道で、特に京での鯖の需要が多かったので、別名「鯖街道」とも呼ばれています。間も無く鞍馬線修学院駅です。

再び余談です。かつてこの街道を挟んで「十一屋」と呼ばれた老舗の割烹店がありました。友人の両親と姉が営んでいた“なまず”割烹店です。一度訪ねたことがあります。両親と悦子、妹が修学院離宮を観覧している間、人数にあぶれた旅人は、鞍馬寺を参拝に出掛けて、修学院駅で待ち合わせして、「十一屋」を訪ねています。遠い昔のことですが、はっきり記憶に残っています。不思議なことです。

本題です。所で、旅人にとって鞍馬寺の参拝は、初めてではありませんでした。学生の頃にも夏に訪れています。記憶に残っているのは、長い急坂を上ったこと。暑さで喉が渇き、途中で飲んだ湧水が冷たかったこと。本殿金

堂の前に舞台が張り出していたことです。

「十一屋」の前をタクシーが通過していきます。割烹店は消えていました。跡地はマンションに変わっています。又、京洛の名店舗が一軒消えました。

タクシーは門前町に入っていました。紅葉の盛りの鞍馬山も、観光客の数は少なく拍子抜けです。旅人にとって鞍馬寺の関心事は、先ず「鞍馬の火祭り」と呼ばれるのが奇祭にありました。何故？毎年10月22日に奇祭が行われるようになったのか？答えてくれたのは、旅を共にしている都タクシーの佐野一人運転手です。彼の語る処により、「鞍馬の火祭り」は鞍馬寺の祭りではなく、鞍馬山にある「由岐神社」の祭であることを知りました。鞍馬寺の山門周辺の集落の人々が、五穀豊穡を願う祭が「鞍馬の火祭り」であり、鞍馬寺と全く関係のない祭でした。

余談です。10月22日は上賀茂神社、下鴨神社の祭神を祀る「葵祭」と同日です。八坂神社の祭神を祀る「祇園祭」も同じですが、神事として執り行なわれる催事であるために、祭り事の延期はありません。今年(2015)の「祇園祭」を予定していました。生憎、関西地方に台風が接近して、京都に行くことを旅人夫婦は中止しました。旅館・俵屋に問い合わせると、神事であるので、台風、大雨に見舞われましたが、举行されたことを知りました。「祇園祭」の時期は、台風よりも梅雨末期の豪雨に見舞われることが多く、旅人も二度も雨の中の観覧でした。雨を考慮して「前の祭り」に対して「後の祭り」が催行されるようになったかもしれません。

奇祭「鞍馬の火祭り」は、石段の上に張られた大注連縄が切られると、由岐神社の二体の神々（八所大明神、由岐大明神）が、神輿に祀られ集落の若い乙女や若人の力を借りて、急な石段を下り門前町の御旅所にお迎えすることで「火祭り」の準備が整います。

時が満ちると御旅所の若者たちが大声で部落に「神事にまいっしやれ」の神事を事触れると、この時を待っていたかのように、各部落は子供たちの「サイレイ サイリョウ（祭礼）」の掛声にあわせるかの様に、子供たちの持つ小さな松明の火は、各部落毎に大松明に移され、やがて各部落の大松明は、石段下に大集結して燃え盛り、火祭りは最大な盛り上げを迎えます。この後神輿が若人の背に担がれて部落を練り歩いた後、御旅所から由岐神社本殿に真夜中に戻って「鞍馬の火祭り」は終わります。たった一晩の祭です。運転手の話が上手く「鞍馬の火祭り」に立ち会った錯覚をした程です。

タクシーを駐車場に止めて、鞍馬寺の参拝に向かいました。鞍馬寺は洛中から陰陽道で、鬼が出入りすると言われる丑寅（東北）にあたり、奇門として忌み嫌われる方角にあたります。鞍馬寺は平安京に遷都された後に、洛中を怨霊悪霊から鎮護する目的で、9世紀末頃に東寺の僧・峯延が入山して真言宗派系の寺院として伽藍が整えられていきました。12世紀に天台宗派に代わり、以後の鞍馬寺は長い間青蓮院の配下にありました。この寺のご本尊は三体にあります。毘沙門天。千手観音・護法魔王尊ですが、鞍馬寺ではご本尊とは呼ばずに「尊天」と称しています。昭和期に入って鞍馬寺は天台宗派から離れて「鞍馬弘教宗」を開宗し以降、鞍馬弘教総本山の位置にあります。

余談です。「尊天」とか「鞍馬弘教宗」とか聞きなれない仏教用語です。「尊

天」とは「すべての生命を生かし存在させる宇宙のエネルギーとされている神」。又「鞍馬弘教宗」とは天台宗の教義の中で「神智学」を教義とした一派です。「神智学」とは神秘的な直観と思弁、幻視、瞑想、啓示などを通じて、神と通じた神聖な知識の獲得や高度の認識に達しようとする一派です。教義の一部にはギリシャ哲学が加味されていると聞きました。お分かりになりましたか？

がんを患っている旅人にとってエネルギーが貰えそうな寺院です。期待して参拝に来ました。寺伝『鞍馬蓋寺縁起』には、鑑真和上と共に渡来した九人の弟子の末弟鏡禎が、ある夜霊夢を見て、山城国に霊山があると告げられます。鑑禎は霊山と告げられたある山の上方に宝の鞍を乗せた白馬が現れます。鑑禎は山に分け入って白馬を探し求めると、突然鬼女の群が襲ってきます。鑑禎の命を救うかの様に、杉の大木が轟音と共に倒壊して、巻き上げた土埃がおさまると、鬼女たちの姿が消えて、倒れた大木の根本に毘沙門天が立っておられたと伝えられています。その地に毘沙門天を祀る草庵が結ばれるのが鞍馬寺の縁起です。平安京を囲む山々に同類の縁起が多く残っています。稻荷山のお狐さん・音羽山の坂上田村麻呂と湧水です。何か平安京に遷都する以前から、山城国（山代一平城京の山の背後の土地）の心象を良くする意図的な配慮を感じます。（この項つづく）

般若心経読本（３）

藤田 克明

〔仏設摩訶（ぶっせつまか）〕

般若波羅蜜多心経（はんにゃはらみったしんぎょう） 唐三蔵法師玄奘 訳

舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是

（舍利子よ、色は空に異ならず。空は色に異ならず。色はすなわちこれ空、空はすなわちこれ色なり。受想行 識も亦 また かくの如し。）

【訳】 舍利子（注９）よ、よくききなさい。形態（物質的現象）は実体のないものだが、実体のないものは形態（物質的現象）なのである。

形態（物質的現象）はまさに実体のないものであり、実体のないものこそがまさに形態（物質的現象）なのである。形態（物質的現象）とともに人間を構成している他の四つの構成要素も、すべて実体のない空性（くうしょう）である。

【解説】

一、前段の詩の起こしを受け、この段から大乘仏教の哲学である「空・くう」思想の展開―「承・しょう」が始まります。それが「色即是空 空即是色」です。有名なこのフレーズは仏教という宗教を俯瞰したとき、この八文字が仏教全体の教えを集約した思想でもあるとされ、仏教の代表的表看板といってもいいと思います。

二、字句をみていきましょう。「色不異空」と「色即是空」、および「空不異色」と「空即是色」は、それぞれ同じことを違う言葉に変えていっています。識者の宮崎忍勝氏は「前者は菩薩が色（もの・形態）に執着する煩惱を空と認識して修行を行い、後者は菩薩が自分だけの悟りの世界に安住しないで大衆に対し空は「ない」と同時に「ある」も意味しているんだよ、と絶望を与えないよう「苦」を上手くさばく働きをいう」と解釈しています。五蘊は、私たちを形作っている基本要素として確かに存在すると釈迦が説いたものです。しかし『般若心経』では、前段に続き再度それを否定し、五蘊は実体をもたない仮の存在だといっています。それが「受想行識亦復如是（じゅそうぎょうしきやくぶによぜ）」（五蘊もまたかくのごとく空である）です。

なお「色即是空」の「色」（「ルーパ・ru pa」）とは、五蘊の一要素である「色」のことですが、ここの「色」という言葉は世のあらゆる物質要素一目でみることができる世界だけではなく、音や臭い、味や温度、さらには飢えや乾きのような体内感覚など、幅広い意味での物質要素一をすべて含んでいます。具体的には「眼・耳・鼻・舌・身」という身体に備わっている五種類の感覚器官（五根）、およびその感覚器官によって捉えられる五種類の対象世界「色（いろかたち）・声（音）・香り・味・触」（五境）を包含して「色」といっています。ですから「色即是空」を、単に「かたちあるものは空である」とか、「眼に見えるものはすべて空である」と狭くとっては間違いのようです。

一方、六境（ろっきょう）（注 10）の一番はじめにでてくる「色」は「いろかたち」だけを指していますので注意が必要です。

三、この段では「色」と「空」がイコールで結ばれており、日常我々が経験する事実を根底から否定しています。これは一体どういうことなのでしょう。まず「色」と「空」の意味する中味を見ておきましょう。

「色・しき」ですが、伝統的解釈は物体、物質、現象の世界、形あるものの総称とされています。しかし色（ru pa）の動詞（ru payati）が「…に形を与える」「…を表わす」という意味であることから、色という語は形態と解釈するのが分かりやすいと思います。

この色と異なるものではないとされるのが「空」です。空の原語は「シューニヤ・s u nya」で空虚という意味ですが、仏教の世界にこの言葉が入ってきたときは、ただの無、空無ではなくなっていたようです。因みに「0・ゼロ」の発見は、この空無からであったことは知られていることです。

空の解釈は多義にわたっていますが、大別して「人空（にんくう）」と「法空（ほうくう）」に分かれるとされます。人空とは我空（がくう）ともいい、自我実在という観念を妄執、迷いであるとしてそれを排除することをいいます。これは釈迦の説いたもので五蘊（ごうん）は確かに存在するが、それは仮の集合であってそこに自我という実体は存在しないという教えです。

一方、法空は自我のみならず世のあらゆる物質的・心理的存在は、原因や条件によって生じ、滅するもの（縁起）であるから不変不滅の実体などない、という大乘仏教の教えです。柔らかくいえば現実にあって現実にとらわれず、現実にとらわれずして、しかも現実を重視するという思想です。人空のみを説いた釈迦や部派仏教に対する大乘仏教の深遠さが窺われます。

ところで、この「空」という言葉に関しては、背景の異なる重要な術語を他の背景をもつ他国語の術語に置き換えるとき、その真意を正確に伝えるのは極めて難しいといわざるを得ず、比較哲学の分野の問題であるといわれています。それ故「sunya」を訳さない識者もおられます。

四、難しい話になりましたが、ここで「色」と「空」との関係を分りやすく単純化、例示化してみたいと思います。二つ例をあげてみます。

世に存在するもの、生きているものの元をずっと辿っていくと祖先などの根元にぶつかります。もっと辿っていくとアメーバー（根足虫綱の原生動物。直径〇、二ミリ）にたどり着き地球誕生になります。このように我々の存在をずっと地球誕生以前にまでさかのぼっていくと「色」（もの）は「空」からきていることが理解できます。逆にいえば、アメーバーから気の遠くなるほどの時間を経て人間が誕生し、私たちが生きているといえます。

ですから「空即是色」（空は即ち色＝存在）ともいえます。しかし生きているもの（生命の存在）は、必ず死んで「空」にもどるので「色即是空」（存在は即ち空）でもあります。なお宇宙物理学者によれば四〇億年後には、太陽が爆発し地球上の動植物等は滅亡するのではないかとはいわれており、そうだとすればまさに現在の「色」は「空」になるといえるのではないのでしょうか。

もう一つ卑近な例をあげてみます。或る大事なレポートを明日までに仕上げなければならないとします。書斎に籠り書き始めたが、なかなか捗らない。だけど何としても明日の朝までには仕上げなければならない。その結果、深夜におよび更に明け方までかかったとします。やっと仕上がったとき、思わず立ち上がって両手を挙げ、背伸びして数回大きく深呼吸しました。その間一睡もしなかったにも拘わらず、ちっとも眠い感じはない自分を発見したとします。しかし書き終えたたん、やっとできたという達成感とともに喉が乾いていることにも気づくし、窓から朝日が射し込んできていることにも気づきます。また机のまわりに原稿や本が散らかっていたり、トイレに駆け込んだり、持参する資料などを確かめたり…いろいろなことに気がきます。一心に打ち込んで整理し、まとめ、書いていたときは、これらのことには一切気が付きませんでした。要するに、物があっても現象があっても、それを感じる心が無ければ「ない」と同じだということです。書くことだけに集中、夢中になっていて「受想行識」という主観の世界の認識は無かったといえます。それが「色は空に異ならず」であり、「空は色に異ならず」です。

すべての現象はないと思えばないし、あると思えばあるのです。心が認め（気が付け）ばあるし、心が認めなければないのです。したがって空とは「ない」ということですが、この例のように「ある」ともいえるのです。つまり「ある」と「ない」の両方の意味、性質を「空」は持っているともいえます。言い換えれば、空とは日常世俗の常識である「～がある」「～がない」という二分法（肯定と否定の止揚（しやう））に基づく捕らわれを捨て、徹底して実体的な見方を排除しているのです。そうすることによって、独断や偏見はもとより迷い・煩惱・執着が完全に払しょくされ、自由な境地のなかで多彩な思惟や判断、認識および実践活動の場が開かれると大乘仏教は説いています。つまり、実体のないものに執着することには意味がなく、ただ苦しみだけを募らせることになる。執着しなければ、心が乱され、煩惱を抱くこ

ともないではないかといっているのです。これらのことは、この世はもはや言葉や思弁の世界ではなく「空」そのものに生きることが大切であるということなのでしょう。

【注 9】 釈迦の十大弟子。

- ① 舎利子（舎利弗（ほつ））…智慧第一、
- ② 目連（もくれん）…神通（超能力）第一、
- ③ 摩訶迦葉（まかかしょう）…頭蛇（ずだ）（清貧な修行）第一、
- ④ 阿難…多門（記憶力）第一、
- ⑤ 富楼那（ふるな）…説法第一、
- ⑥ 阿那律（あなりつ）…天眼（てんげん）（真理を見通す）第一、
- ⑦ 須菩提…解空（空の理解）第一、
- ⑧ 迦旃延（かせんねん）…議論第一、
- ⑨ 優波離（うぱり）…持律（戒律を守る）第一、
- ⑩ 羅睺羅（らこうら）…蜜行（みつぎょう）（厳密）第一。

【注 10】 六境（ろっきょう）は「色（しき）・声（しょう）・香（こう）・味（み）・触（そく）・法（ほう）」の六種の境をいう。境（「ヴィサヤ・visaya」）とは、認識の対象（物）または対象領域の意で、六根（ろっこん）（「眼（げん）・耳（に）・鼻（び）・舌（ぜつ）・身（しん）・意（い）」の感覚、感覚器官）は、六境にそれぞれ対応している。「六根」と「六境」との両者によって、さらに六種の認識作用が生まれるとされる。

六境の六番目の「法」とは、六根の「意（心）」によって心に思い浮かべられる（昨日のお菓子のような）ものをいう。つまり心の対象ということ。なお、「六根」と「六境」を合わせて「十二処（じよ）」と呼んでいるが、釈迦が世の中をとことん観察した結果、世は認識器官と認識器官によって認識される対象（物）とに分かれているということを発見したのである。そして、さらに釈迦は六根の「意」の作用により、その結果生じてくる六つの認識分野（六識（ろくしき））が別途存在すると考え、この六識を加えて「十八界」なる世界観（世の認識観）を構築している。

（つづく）

文化講座・講演会・落語会

奈良興福寺文化講座 2017年年3月9日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

講演：「興福寺の鎌倉大復興」 興福寺執事長 多川良俊

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：（学）文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(J R 新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から 8 分、都営新宿線
新宿駅 3 分)

第 80 回 新三木会講演会のご案内

1. 日時・会場 2017 年 3 月 16 日(木) 13:00-15:00 如水会館

2. 演題・講師 『昭和史の岐路に関する争点について (仮題)』

秦 郁彦氏 現代史研究家、元千葉大学、日本大学教授

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com

TEL: 047-464-4063

フルネーム・卒年・所属 (例: 一般・紹介者名)

会費: 2000 円 婦人 1000 円 学生無料

茶話会: 15:15-14:20 千円 (自由参加)

4. ホーム <http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

● 4/16, 第 81 回 『今後の日露関係について』 (仮題)

コンサタンチン・サルキソフ氏

山梨学院大学名誉教授、法政大学講師

ロシア科学アカデミー東洋学研究所顧問

● 5/18, 第 82 回 『未完の大国・ブラジルの現状と将来』 (仮題)

堀坂浩太郎氏

上智大学名誉教授

栗田政彦氏

日伯経済文化協会副理事長

落語 《柳家こはん・こはんの会》

1、 日時 2 月 24 日 (金) 夜 6 時半

2、 会場 湯島天神 参集殿 二階

3、 演題 「妾馬」「鮑のし」

4、 木戸銭 2 千円

事務局

< 事務所までの道のり >

場所: 〒110-0016 台東区台東 2-21-9 双葉ビル 2F 202 号
(電話・FAX 番号: 03-3837-0290)

御徒町界隈では、J R 山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

① J R 御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2 ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに 8 ブロックほど直進すると、

② 都営大江戸線の新御徒町駅の A 2 入口が右側にあります。やや進むと (都営大江戸線の新御徒町駅 A 2 入口を出た場合は右に回ると)、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを 7 ブロックほど

直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。(1階は焼肉屋「もとやま」。)そのビルの2階です。

<投稿歓迎><図書の推薦依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくだされば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

<振込先> 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・442号

発行：2017年2月14日

: 天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室
TEL・FAX 03-3837-0290
E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp